

‘初夏一文字’を用いた5月中旬どり一本ネギのトンネル作型

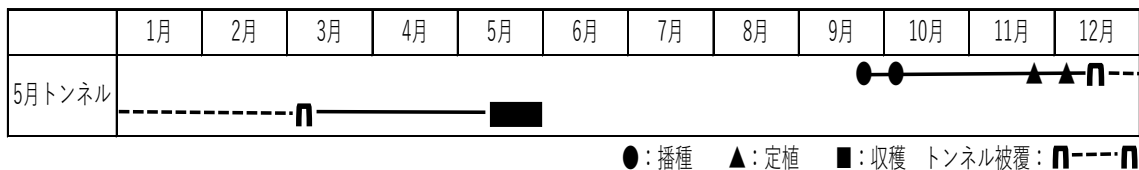
1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

一本ネギの端境期となる5月中旬～下旬は不抽台系の坊主不知ネギが用いられているが、品質が優れる一本ネギの作期拡大が求められており、トンネル作型の出荷が前進している。同作型で用いられている品種‘初夏一文字’は肥大性に優れるものの晩抽性が弱く、抽台発生の少ない栽培管理方法が求められている。5月中旬でも安定した収量を得ることを目的とし、‘初夏一文字’に適した播種、定植日、被覆除去日を検討したので紹介する。

(2) 情報・成果の概要

- 1) 播種を9月下旬～10月上旬、定植を11月下旬～12月上旬に行うことで、抽台の発生も抑え、5月中旬の早期から安定した収量を得ることができた。
- 2) 3月中旬前半に被覆を除去し追肥、土寄せ作業に入ることによって収量、太物割合を増やすことができると考えられた。



2 試験成果の概要

‘初夏一文字’を用い、2016年から2019年の4か年において、5月どりトンネル作型の栽培管理方法の検討を行った。いずれの年度も200穴セルトレイに4粒/穴播種し、育苗した苗を条間1m、ポット間隔10cmで定植した。農ポリによる被覆を12月下旬～3月まで行い、被覆除去後は収穫前まで適宜灌水を行った。

(1) 適切な播種、定植日の検討 (2016～2019年)

播種を9月中旬、定植を11月中旬に行うと抽台の発生がそれ以降に播種、定植した場合と比較して多い傾向が見られた。年によっては抽台率が10%を超える場合もあり、早期の播種、定植は2月上旬時点で低温感応する太さに達し、花芽分化を誘導してしまう可能性が高まると考えられた。9月下旬～10月上旬播種、11月下旬～12月上旬定植することで抽台発生を抑えつつ、十分な収量を得ることができた。(表1)

(2) 被覆除去日の検討 (2019年)

3月11日に被覆除去を行った試験区は早めに追肥、土寄せ管理を行うことができ、それ以降に被覆を除去した区と比較すると太物割合(2L率)が増え、収量が増加する傾向が見られた。(表2)

表1 異なる播種、定植日が収量および抽台率に及ぼす影響(散水あり)

試験年	播種日	定植日	収穫日	上物収量 ^z		抽台率 (%)	2月上旬の 葉鞘径(mm)
				(t/10a)	(箱 ^y /10a)		
2016	9月15日	11月17日		4.4	1,168	17.5	6.3
	9月25日	11月25日	5月23日	5.3	1,488	0	5.4
	10月5日	12月7日		5.2	1,420	0	5.5
2017	9月16日	11月15日	5月16日	4.8	1,342	14.5	7.3
		11月24日		6.2	1,665	1.3	6.9
2018	9月14日	11月15日		5.8	1,600	2.5	5.8
		11月25日	5月21日	5.3	1,490	0	5.6
	10月2日	12月1日		4.9	1,463	0	4.7
2019	9月13日	11月15日		3.9	1,069	7.5	6.6
	9月25日	11月26日	5月14日	3.5	1,090	2.7	5.8
	10月1日	12月3日		3.3	872	0	5.8

^zM規格(40~75g)以上の合計収量

^y3L:14本/箱、2L:20本/箱、L:30本/箱、L4:40本/箱、M:65本/箱として算出

表2 被覆除去の早晚が収量^zに及ぼす影響

試験区	収量 ^z (5月14日)							
	被覆除去日 (3月)	本数 (本/a)	重量 (kg/a)	調整重 (g/本)	出荷箱数 ^y (箱/a)	2L率 ^{x1} (%)	2L+L率 ^{x2} (%)	抽台率 ^w (%)
	11日	3,650	491.9	135.0	134.6	24.7	93.2	0
	14日	3,775	440.6	117.5	121.9	11.3	73.5	0
	25日	3,500	347.9	98.9	109.0	1.4	75.7	2.7

^zM規格(40~75g)以上の合計収量

^w抽台率=抽台株数/収穫株数×100

^y3L:14本/箱、2L:20本/箱、L:30本/箱、L4:40本/箱、M:65本/箱として算出

^{x1}(2L規格(150~230g)本数/上物合計本数×100

^{x2}(2L規格(150~230g)本数+L規格(100~150g)本数)/上物合計本数×100

※2019年試験 品種:初夏一文字 播種:9月25日 定植:11月26日 被覆開始:12月10日~

3 利用上の注意点

- (1) 本試験は弓浜砂丘地域(砂質土壌)における5月中旬どりに向けた試験結果であり、他の地域(土壌)については別途検討が必要である。
- (2) 本試験は肥大に優れるが、晩抽性にはやや劣る‘初夏一文字’を供試した試験であり、気象条件によっては抽台の発生が増える可能性がある。
- (3) 生育促進のために行う散水はべと病を助長するので、防除が必須となる。

4 試験担当者

弓浜砂丘地分場 研究員 梶本悠介
主任研究員 井上浩
分場長 中村博行